三田図書館・情報学会運営委員会議事抄録

日時：2022 年 6 月 10 日（金）18:00～19:30

場所：Zoom によるオンライン開催

出席者:　運営委員：　安形麻理，池谷のぞみ，岸田和明，倉田敬子，谷口祥一，田村俊作，根本彰，福島幸宏，松本直樹，宮田洋輔，武者小路信和（五十音順）

監事：　汐﨑順子，長谷川豊祐

事務局：　安形麻理，松本直樹，宮田洋輔

欠席者:　なし

【委員の交代】

谷口会長より，資料 13 に基づき，委員の交代（運営委員，編集委員会委員長，事務局，会長）について提案および報告がなされ承認された。

【2021 年度事業報告】

1. 編集委員会報告

安形氏（編集委員会委員長）より，資料 1, 2 に基づき，学会誌（No.85, No.86）の刊行，編集委員会の開催，編集状況，バックナンバーの移行，学会誌発行にかかわる経費について報告がなされた。

2. プログラム委員会報告

池谷氏（プログラム委員会委員長）より，資料 3，4，5 に基づき，月例会（第 185 回～第 187 回），研究大会，プログラム委員会の開催について，報告がなされた。

[質疑応答]

- 研究大会の参加費はどういう形で徴収したのか。月例会のオンライン開催でも徴収しようと思えばできるのか。
  - オンラインチケットサービスの Peatix を利用した。月例会に使用することもできる。

3. 研究助成

松本氏（学会事務局）より，資料 6 に基づき，研究助成に関する報告がなされた。2021 年度は 1 件の申請があり，関根博子氏による研究課題『視覚障害者が健康情報を獲得する際のプロセスモデルの構築』に助成を行った。

4. 決算報告

安形氏（学会事務局）より，資料 7 に基づき決算に関する報告がなされた。監事の長谷川氏並びに汐﨑氏から 2021 年度決算処理が適正になされていることが報告された。監事より学会誌の電子化に伴い，費目「印刷費」が本来の「印刷費」ではなくなっていることが指摘された。

[質疑応答]

- 研究大会予稿集を印刷して国立国会図書館に納本しているのか。納本制度上，印刷版が求められているということか。
  - 基本的に従来通り，印刷製本して，納本分と保存分を作成している。これまで印刷製本したものを寄贈しているので同じ形を続けている。
  - 学会誌は電子版のみ，有料での提供のため，現在の NDL の収集範囲に該当せず，雑誌記事索引の対象になっていないが，DOI を付与して別の形で検索できるため電子ジャーナルとしてのみ刊行することで問題ないと考えている。一方で，予稿集は電子的な公開の方針か決まっていないため，印刷版を納本しないと刊行廃止と思われかねない。そのため，以前と同じく印刷媒体での NDL への納本を続けている。今後，NDL が電子版のみの資料をどのように収録するのかの具体的方針を見ていく必要があるだろう。

【2022 年度事業計画】

1. 編集委員会

安形氏（編集委員会委員長）より，資料 8，9 に基づき説明がなされた。

- No.87 については，編集作業を終了しており，6 月末に公開予定である。No.88 は 12 月末に刊行予定としている。
- 2022 年度学会賞の選考を，No.85，No.86，No.87（刊行予定）掲載の原著論文 6 編を対象として選考委員会を設けて行う。
- 査読の方式の再検討（ダブルブラインド制導入の可否など），効率的な作業手順の工夫，引用文献記載例の改定，査読者と著者の利害関係の確認方式，出版ライセンスの検討，バックナンバーの移行について進めていく。
- 谷口会長から，出版ライセンスについては会長が引き継ぎ検討を進めることの補足説明があった。

[質疑応答]

- 引用文献記載例の改訂について SIST02 に基づく限りはできているのではないか。SIST02 が公開停止とされている以上，引用文献記載方法を検討することに当たらないのか。検討事項をそのように記載したほうが良いのではないか

- ➢ 記載方法そのものの見直しを検討する。国際的な引用文献の書式に則りつつ，日本語文献や新聞なども記載しやすい方式を検討していく。

2. プログラム委員会

池谷氏（プログラム委員会委員長）より，資料 10 に基づき説明がなされた。

- 研究大会は 11 月 12 日（土）に対面で開催する。オンライン配信については今後検討していく。昨年度の反省から，研究発表を中心とすることとし，橋本記念講演・ラウンドテーブル・シンポジウム等は行わない。
- 講演等の謝金が発生しないため，会員からは参加費は徴収せず，非会員からのみ参加費を徴収することとする。
- 発表申込の審査及びベストプレゼンテーション賞の選出・授与は昨年度通りに行う。
- 月例会は，第 188 回～190 回の 3 回の開催とし，COVID-19 の感染状況，参加者が拡大している現状から，オンライン開催とする。

3. 研究助成

松本氏（学会事務局）より資料 11 に基づき、2022 年度の応募状況，及び門脇夏紀氏による申請課題『深層学習を用いた主題件名の自動付与』の採択について説明がなされた。

以上，本年度の事業計画が承認された。

【2022 年度予算案】

松本氏（学会事務局）より，資料 12 に基づき予算案についての説明がなされた。

[質疑応答]

- 数年前には学会予算が逼迫傾向にあるとされていたが，今年度の予算案から見て，そうした傾向は止まったと解釈して良いのか。
  - ➢ 会費収入の減少傾向自体は変わらない。個人会員の減少は続いており，機関会員は予測よりはゆるやかではあるが確実に減少している。学会誌電子化の計画段階において，個人会員数を一定数以上維持し，かつ慶應義塾の補助金が続けば，機関会員からの会費収入に頼らずに学会運営を維持できるよう検討していた。そのため，現在は予算と決算のバランスが取れている。年間 10 本程度の論文数掲載であれば単年度の会計で十分賄えるように学会の収支構造を変更した結果と言える。
- 事務員の交通費を半分在宅半分出勤という勤務形態に基づいて計算してい

るが，今後も同じ形態を継続していく方針なのか。事務処理体制として支障なく処理できているということなのか。

- ➢ 現時点での事務員の勤務体制は週 2 日出勤，残り 2 日は在宅勤務という形で組んでいる。COVID-19 等の状況が改善しない限りはこの状態が続くだろう。来年度についてはまだ検討していない。

- ● 監査報告のときに，費目「印刷刊行費」が不適切という指摘があったということか。

  「印刷費」がそぐわないという指摘を受けて，「印刷刊行費」になっていたのではないか。予算と決算で費目の名称が変更されていたということではないか。「雑誌刊行費」と「印刷費」に分けたほうが良いのではないか。

  - ➢ 実態に合わせて科目名は修正していく。

- ● 国立国会図書館法の改正があり，民間のオンライン出版物も納本の対象になる。そうすると印刷し納本する必要もなくなるかもしれない。法制度上では機関リポジトリによる公開は納本の対象とならない。独自の学会誌サイトなので，納本しているという考えで良いのか。

  - ➢ 現状では電子納本にどのような手続きが用意されるのかは分からない。学会誌独自のサイトを用意し運用している。機関リポジトリへの収録は補足的な位置づけになっている。NDL がどのように電子納本を進めるのかは分からないが，独自の学会誌サイトという位置づけになっている。

- ● 研究大会の予稿集も，制度の変更に応じて運用を変えていく必要があるだろう。学会サイトに掲載している PDF ファイルを納本する義務があるのではいか。そのあたりの考えを整理する必要があるのではないか。

  - ➢ 国会図書館側の方針が現時点では明確ではない。具体的に電子納本するのが適切なのかが決まらないと予稿集の今後についても決められない。学会誌もどのように納本を進めていくのかは NDL からの通知等を注視していかなければならない。

以上，本年度の予算案が承認された。

【その他】

1. 学会員の異動

松本氏（学会事務局）より，資料 13 に基づき学会費長期滞納者 3 名の除名，および個人会員と機関会員の学会費支払状況について説明がなされた。

以上，学会費長期滞納者の除名案が承認された。

[質疑応答]

- 谷口会長は所属大学において今年度研究休暇を取得中だが，従来は研究休暇該当者は学会の役員から除外していたように思われるが，そうした扱いは変更したのか。
  - これまではそういう形で慣例により運用していた。専攻内で学会運営に関与できる人員数が不足しているため，研究休暇中ではあるが会長を務めている。
- 国内の図書館情報学の雑誌ごとに，引用の仕方や注の付け方が違っていて，原稿執筆時にやりづらい印象があった。無理に統一すべきという話ではないが，関連学会のものを参考にしながら，書き手が書きやすい方式を検討していただきたい。国際的なものを採用するのが良いのかという考えもある。
  - 中々難しい問題である。編集委員会の最初の議論では，ほかの学会誌を見るより，引用文献管理ツールを利用しやすい形がよいのではないかということもあり，国際的なスタイルをベースにしたいと考えている。
  - 国際的にも，図書館情報学の雑誌群において統一されておらず，1 つの方式に収斂していない状況にある。

（記録担当：宮田）